

## 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2491300014		
法人名	株式会社センチュリークリエイティブ		
事業所名	グループホームあみーご鴻之台		
所在地	三重県名張市鴻之台5番町10番地		
自己評価作成日	令和5年1月3日	評価結果市町提出日	令和5年4月7日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhyou_detail_022_kihon=true&amp;JizyosvoCd=2491300014-00&amp;ServiceCd=320">https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhyou_detail_022_kihon=true&amp;JizyosvoCd=2491300014-00&amp;ServiceCd=320</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	令和 5 年 1 月 19 日

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

外出機会が少ないため、施設内での活動に力を入れている。具体的には季節感が出るように工作にて飾りものを作ったり、イベントを開催している。その他にも全施設共通で3か月に1度、彩食イベントとして食事のイベントをおこなったり、eスポーツ大会(オンラインでのオセロや将棋の大会)を開催したりしている。また、会社全体で職員のスキルアップを目的とした研修を月に1度開催している。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

近鉄名張駅から徒歩15分ほどのアパートや林に囲まれた閑静な場所にグループホームは設置されており、居室のある建物と共用空間である居間や食堂がある建物が別で、それぞれの建物を2階の廊下でつないでいる、広く独特な建物である。その中で利用者への接し方を、職員は「共感と尊重」の心で丁寧に、配慮した安心した言葉使い・声掛けで支援しており、その方針は施設長により徹底されている。コロナ感染対策を最優先してきた前期から、当期はその経験を踏まえて、以前のような地域との積極的な交流に取り組んでいる事業所である。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

## 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	施設の入口に基本理念を設置、また引継ぎシートにも挟んでおり、いつでも見返せるようにしている。また、職員会議の前には職員で唱和してから会議を開始している。	職員と一緒に考えて作った理念の中の「共感と尊重」を日々の支援の根本として、利用者への声掛けや言葉使いを丁寧にする事を心掛けて、利用者それぞれのペースで生活していただけるよう支援している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ発生後は利用者の外出は大きく減った。そのため、可能な方は家族と電話での関わりを持ってもらっている。また、コロナ感染者数が少ない時は面会して頂いている。	自治会に加入しているが、コロナ感染対策を優先していたため、地域との交流は行えなかった。今期は、以前取り組んでいたカラオケ、音楽リハビリ等の地域ボランティアの受け入れを再開しようと検討している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	2か月に1度、運営推進会議を開催し、情報交換・イベント・施設内での事故内容の報告や対策を伝えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では施設内でのイベントや事故の報告や対策、会社での取り組みなど伝えている。また、身体拘束委員会を設置し話し合いをしている。	2か月に1回、市役所・まちの保健室・民生委員等の出席により会議を開催している。施設長は、会議を外部の意見やほかの施設の取り組みや様子を聞く重要な機会ととらえており、意見を運営に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	月に1度は施設の空き状況などを話しに地域包括支援センターへ行っている。今後、介護相談員の訪問も再開していく予定になっている。	運営推進会議で、定期的に市役所には事業所の取り組みや実情を報告・相談しており、地域包括センターには、事業所の入居状況により訪問している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束については日頃から職員間で確認し会議でも話しあうことがある。また運営推進会議では身体拘束適正委員会を設置し開催している。玄関の施錠については施設の構造上、見守りが出来ず危険回避のため施錠をさせて頂いている。	2か月に1回、運営推進会議後に身体拘束適正委員会を開催していた。会議内容を全職員に周知し職員は身体拘束の理解を深めており、スピーチロックの研修を通して利用者への言葉使いの大切さを学んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	施設内で外部を招いての研修を実施している。また、職員間でも言葉遣いや介助時などの虐待防止のため注意し合っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	入居の問い合わせがあった時に必要に応じて説明させて頂いている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時はしっかり時間を取り、細かく説明を行っている。疑問点などあればその場でお答えしている。制度改正に伴う変更があった時は説明文とともに書面にて同意を頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	基本的に支援など家族の意見が欲しい時には電話で相談しており、要望があれば職員に周知し支援に反映するようにしている。また、その他にも重要事項説明書に苦情相談窓口の記載をしている。	施設長が定期的に家族に電話連絡を行い、家族の要望を聞くようにしており、法人も不定期で匿名アンケートを家族に送付し、家族の意向や要望を聞くようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1度、施設内で会議を行い職員の意見や提案を聞く機会を設けている。また、会社役員との会議の時に報告し反映させている。	月に1度の職員会議で職員の要望を聞く機会を設けて、その意見、要望内容によっては法人運営部署と管理者が集まる管理者会議で議論し、運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の勤務状況や施設への貢献度など会社役員に伝え給与アップにつなげている。また、資格取得への助成金についても説明している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	介護職員のための研修をいくつも開催している。昨年は月に1度の介護職員スキルアップ研修や2カ月に1度の接遇研修、社協開催の研修など多くの研修機会を確保した。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	毎月、挨拶程度に同業者施設に行きパンフレットや施設の空き状況を伝えている。また、同一法人内では常に情報交換を行い支援に反映させている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に本人や家族に面談し困っていること不安に思っていることなど聞き取りを行い、本人がなるべく今までと変わらない生活を送ることができるよう計画を立てている。また、入居してからも必要な支援を職員間で見つけ支援につなげている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	申込前の相談から困っていることや不安なことなど可能な限り聞き取りを行い、入居が決まった際にも再度、必要なことを聞き取りしている。入居した後も必要なことは家族に伝えている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族に聞き取りを行い、必要な支援を決める。他のサービス利用もあれば情報収集を行い必要な支援に活かしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者のすべてを支援することなく、本人が出来ることは本人のペースで行えるように職員へ周知し支援に努めるようにしている。また、職員と本人と一緒にできることはないか日頃から探している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ感染症が発生し面会の機会は減っていたが、ここ何カ月かで面会の機会も大きく増えてきた。家族によるが電話での関わりを続けているかたもいる。また、可能な方は病院受診などを家族にお願いしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居前から関わりのある方は電話などで関係を継続されている方もいる。面会では子供だけでなく、孫もくることが増えている。	コロナ禍の中、より利用者と家族のつながり、関係を深めて、途切れないようにするため家族との面会も早い時期から可能にして、直接顔をみてコミュニケーションをとってもらえるよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士での会話は耳が遠かったり、認知症の関係で成り立たないことがあるので職員が間に入り良い関係が築けるように努めている。その逆に気が合わない方もいるのでトラブル防止にも気を付けて対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	特に退居後すぐに電話がかかってくる人が多いので今までと変わらず出来る限りの対応を心がけている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者一人ひとりの希望に耳を向けて記録に残し、出来る限り支援に反映出来るようにしている。本人の意思表示が難しい方は最善となるように職員同士で考え支援している。	本人・家族とも話をし、本人の希望や意向を聞くよう支援しており、判断が困難な利用者には、二者択一の選択肢を用意したり、職員同士が話し合い、利用者の意向を検討するようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	担当のケアマネから出来る限りの情報を収集し必要な内容は職員で共有している。特に入居したばかりの時は環境が変わるので生活していくうえで必要な情報を記録に残して支援につなげている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	介護職員は毎日、介護記録やモニタリングにて日常生活や心身の状態を記録している。必要なことは職員間で周知し支援につなげており、月に1度の職員会議の時にも話し合うことがある。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の生活の中で体調変化していることや異変など記録に残し、状態の把握に努めている。必要なことは医師に相談や家族にも伝えている。	体調の変化や特別な事情がない限り、半年に1回介護計画をケアマネが作成している。モニタリングを出勤職員が毎日行い、その結果をもとに現状に即した計画を作成するようにしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員が出勤した時に前回出勤までの引継ぎシートを確認し、支援の方法や服薬の変更についてなど確認している。また、職員の気づいたことや提案する欄もあり支援に活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の希望があれば職員に周知し対応している。本人に必要な物品があれば家族に相談し購入も行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	音楽リハビリやボランティアのカラオケ、紙芝居など施設に招いて行っていたがコロナ感染症が広がってからは開催できていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月に1度、訪問診療を受けており、その際に利用者の変化や必要な情報をかかりつけ医に伝達し連携を行っている。また、緊急時などにも対応してもらえる関係を築いている。	入居契約時に、本人・家族の同意のもと事業所の協力医に変更している。協力医は月に1度訪問診療を行っており、日々の健康管理は看護師が対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日常の変化は常に看護師に伝達し相談している。早急に伝達したいことは電話にて指示を仰いでいる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者の日々の状態の変化は協力医に伝えている。家族には入退院がスムーズに行くように入居時や入院が必要な際にはご協力頂けるように声をかけさせて頂いている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	あみーご鴻之台では看取りを行っておらず、入居時にはそのことを家族に説明している。利用者の状態が変化していきグループホームでの生活が難しくなってきたときは早急に家族に相談し本人にとって適切な施設への移動を提案している。	入居契約時に、事業所では看取りは行わないことを本人・家族に説明し同意を得ている。できるだけ本人の意向を優先し生活支援しているが、難しくなってきた際は地域の施設に移動できるよう相談支援している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	多くの職員が救命講習、AEDの使用方法を受講している。事故発生時にはその時の状態や対応など事故報告書として記録し職員で周知している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、避難訓練を実施しており、職員には水消火器の訓練も行っている。また、3日分の水や食料品その他の物を準備している。	年2回、前期は火災を想定した避難訓練を行った。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者には特に言葉遣いを気をつけており、失礼だと思われることがないよう、機嫌を損ねることがないように対応を心がけている。	事業所として、利用者に対する職員の言葉使いを特に注意する事とらえており、接遇の研修やスピーチロックの研修を通して、職員は丁寧で利用者に配慮した安心できる言葉使いを心掛けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人に希望を聞くと返答がほとんど返ってこないのので、選択できるようにいくつか選べる声掛けをしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	大まかな1日の予定はあるが(食事や入浴)、基本的には利用者の自由に過ぎて頂いている。出来る限り職員が関わる機会を持ち、孤立することが無いように意識している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴前に可能な方は職員と一緒に衣類を居室に取りに行っている。イベントでは浴衣やおしゃれな服を着ることがあり、2カ月に1度、訪問理容に来てもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	ご飯やみそ汁は盛り付けを出来る方をお願いし手伝って頂いている。食事のイベントでは職員と一緒に出来る調理をして頂いている。	誕生日やイベント時には、利用者がちらし寿司をまぜたり、ロールケーキのトッピングをしたりと、できるお手伝いをして職員と一緒に調理している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や水分摂取量など記録している。食事は本人が食べやすい状態で提供し、水分は好みを把握し提供するようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアの声掛けをしている。自分で出来る方には声掛けだけで、義歯の清掃など必要な方は職員が支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個人での排泄の間隔がある為、間が空いている方には職員がトイレの声掛けを行っている。トイレに入った後は必要な支援のみをするようにしている。	トイレで自立した排泄のできる方が3名、6名は職員が、トイレ誘導・パッド交換を行っている。夜間はポータブルトイレやセンサーマットを利用し、排泄記録表を参考に排泄支援をしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日、10時と15時の体操を実施し体を動かす機会を設けている。また、便が出にくい方はヨーグルトを出して食べて頂いている。それでも出ない方は看護師の指示のもと便薬を服用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴の時間は職員や業務の関係で決まっているが無理に入浴を促すことは無く、拒否があれば次の日などに再度声かけしている。	週に2～3回を目安に、午後3～4名が入浴している。車いす中にも入れるほど広い浴場で、ゆっくり入浴してもらっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自室には自宅から持ってきた毛布や枕を使っている方や家具など持ち込まれている方もいる。本人が欲しいと希望があれば家族に相談してお持ち頂いている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	翌日の薬を夜勤者が準備し、設置間違いが無いようにチェックする。また、朝に出勤した職員2人で再度確認、服薬する時にも本人の薬で間違いが無いか確認し服薬するようにしている。状態の変化があれば医師に相談している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	出来る方には自室で洗濯物を干して頂いたり、その他にも手拭きやランチョンマットを畳む手伝いやビニール袋を詰める手伝いをお願いしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ感染症の為、外出支援はドライブぐらいいしか出来ていなかったが初詣に行ったりなど少しずつ外出支援を増やしていく予定。	コロナ感染対策を優先し、対外接触を避けるため日常的な外出は控えている。春には青蓮寺湖へのドライブにいったが、当期以降は、コロナ感染対策を行いながら外出支援に取り組む予定である。	施設長も日常的な外出支援を当期の事業所の取り組むべきポイントと捉えており、職員配置・コロナ対策と懸案事項は多いが、家族や地域との協力で努力されることを期待する。



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現状、買い物支援は出来ておらず、本人が希望したものを職員が購入するようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人より希望があれば電話をつなぐようにしている。本人より希望が無くても、家族には喜んで頂けるのでいつでも電話を下さいと伝えている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビング内では季節を感じることでできる装飾などを飾り、玄関入口には花を飾り利用者と育てている。トイレや浴室には分かるように表示をつけている。	利用者が日中過ごすリビングは非常に広く明るく、ソファも配置されており、それぞれ自由に過ごせるようになっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングでは自席の他にソファや一人用の椅子など設置しており、いつでも使用できるようになっている。また、和室スペースには布団が敷いてあり臥床することができるようになっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に使い慣れた物や好みの物が無いか確認しお持ち頂いている。また、必要だと感じたものは家族に相談している。	1階と2階に居室が分かれており、居室にはTVやダンス、位牌、家族の写真などそれぞれが自分の必要なものをおいて過ごされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各居室入口には名前が貼ってあり自分の居室だと分かるようにしている。トイレなども分かるように貼り紙をしている。		